



はじめに

「誰でも調子に乗れる書道塾」として各地でワークショップを開催していると、さまざまな人と出会えるようになった。始まりは、障害のあるKくんが高等部を卒業したあとの学び場的な展開だったが、それはただのきっかけだった。そうこうしているうちに、いろいろな人が（決して多くはないが）少しずつ増えてきた。参加した方々の声の中で多いのが、「居心地がよかった」「夢中になって楽しかった」「何かすっきりした」というものだ。今回は、塩竈市美術館との事業で、すみあそびと対話の時間を組み合わせて行った「“ここちよい”の実践プログラム①」を振り返りながら、「ここちよさ」とは何かを考察したい。

その前に、「いま」を考える

多様性の尊重、ダイバーシティ、インクルーシブ、誰1人取り残さないSDGs、おそらくはすべての人々を包括し、誰にとっても居場所のある世界を作りたいという人類共通の願いのもとにわたしたちは生きている。とはいえ、恐ろしくも差別的で、二極化し、格差のある、そんな世の中にすら見えるのが「いま」かもしれない。好きな言葉ではないが、「不登校」というものの取り扱い方も、法整備は整ったとはいえ、まだまだ「行く」か「行かない」の選択肢のあいだで苦しんでいる子や親は多い。障害のある子どもにとっては就学指導委員会でかなりがっちりと、特別な場に「行く」か「行かない」か決められた上で支援が始まる。どうやら変えられない制度問題などというものを嘆いてもしかたがなく、それであればわたしたちができることを提案するしかない、というところで決まったのが今回の「ここちよい」の実践プログラムであった。わたしたちが多様性という言葉を使ったときにイメージしてしまう世界は、もしかしたらすでに「多様な認知をしている誰か」と「そうでないわたし」のように、すでに分断されているのではないか。そうであれば、その構造を保ったままどんな話を聞こうとも、対等な関係を作ることはできない。

誰にとっての「ここちよさ」か

当日は美術家であり、アートディレクターとして障害のある人の表現活動をサポートしている中津川浩章さん (<https://www.lascaux-labo.com/>)をゲストに迎えた。わたしの墨遊びの時間は、いつも始まりも終わりもない。参加する人が、そのタイミングで準備したり、じっとしていたり、眺めていたり、そんなふうになり、いつの間にかいろんな人が書き出す。実はすでにここから

世界が始まっていて、自分のタイミングを大切にされることは何よりも重要だと考えている。書き出すまでに、とても時間がかかるある青年を中津川さんが観察し続けてくれた。彼は何度も書道塾に来ているメンバーなのだが、一見、何もできず困っているように見えなくもない。そのため、学校や施設などでは指示されることも多かった。そうすると今度は途端に固まってしまう。つまり困っているわけではなく「考えて」いるだけなのだ。考えている最中に次の指示をどんどん出される。それは彼にとっては辛い環境になってしまう。待っていると（書道の場合は、我々は待ってすらいないが）彼の中にある書きたい漢字を次々と生み出していく。「この時間が大事だね」と語り合う。ここちよさを考える重要な要素の一つは、「時間感覚」かもしれない。始まりも終わりもないゆるい場を、「ここちよい」と思うか、「まとまりがない」と思うか、それは実はファシリテーター自身の価値観そのものである。そういう視点で見ると、世の中には「まとまりがある」「揃っている」「乱れていない」ということがよしとされる雰囲気がたくさんあって、同じ文字がずらりと並んだ教室掲示、甲子園の応援、制服。このあたりから大人がちょっと開放されることも必要な気がする。

自分で決めるという「ここちよさ」

ファシリテーターによって、いろいろなものが形作られ、結果が出され、というようなワークショップの展開に「やらされている」という感覚を持ち、ワークショップ嫌いになった子どもたちもいる(残念な事例は震災後によく耳にする)。その子どもたちが中津川さんのアートワークショップで子どもたちが一変した話を聞く。やりたいことをやれた、という感覚を取り戻したとき、人はどんどんその場に対して心を開く。自分で決めるここちよさを取り戻したのだと思う。

対話の時間に参加したメンバーは、本当に様々で、それぞれの自己紹介もないまま対話に入った。それゆえに自分が何を感じているのかを遠慮せずに話すことができたとも言えるし、一方でそれぞれが過敏に反応する言葉も実は多かったとも言える。安心して話せるかどうか、というのは遠慮しながら話すこととも違うので、「言いたいことが言える」という前提に含まれているのは、「誰かが傷つくかもしれないけれど、それは実はお互いさまだから言い合う」ということだ。しかし、今は配慮が先立ちすぎるがゆえに、「言いたいことが言えない」になり、結果、「匿名で呟く」という言語文化になってしまったような気がする。そのあたりの「ここちわるさ」というのは完全に大人側の問題で、正直なコミュニケーションを取り戻していく作業が、実はとても重要なのではないかとも思う。

「“ここちよい”の実践プログラム②」は、9/30に開催。より自分ごととして「ここちよさ」について掘り下げていこうと思う。



7/1の対話のじかんの様子（塩竈市杉村停美術館）

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、「旅する書道塾tane」も開催中。<http://ikuko-sakurai.com>